

令和7年度 データサイエンス・AI リテラシー教育プログラム 自己点検・評価(大学版)

評価日時: 令和8年3月25日

開催場所: 武庫川女子大学中央図書館棟

目的: 令和7年度の「データリテラシー・AIの基礎(リテラシー教育プログラム)」の自己点検・評価

評価項目: 文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)」

自己点検・評価の視点	内容	点検・評価結果
学内からの視点		
プログラムの履修・修得状況	令和7年度は、前期に食物栄養学科の2年生192名、英語グローバル学科グローバルコミュニケーション専攻の2年生67名、後期に13学部20学科の1年生2,098名が履修し、単位修得率は96.8%であった。「データリテラシー・AIの基礎」では、全15回の講義で確認テストを課し、LMS(Google Classroom)に蓄積されたデータから個々の学生の課題提出状況や理解度を週単位で把握し、理解度が十分ではない学生に対しては再テストを課した。また、出席状況・確認テストの得点状況に応じて「データサイエンス学習支援ルーム」から学生に連絡をとることに加え、各学科の共通教育委員・クラス担任との連携で当該学生の状況を把握し、継続的な履修を支援した。再履修生のうち、卒業学年の学生については必要に応じて面談を行い、単位修得に向けた支援を行った。	今年度の単位修得率は昨年度とほぼ同様であった。今後も個々の学生に対する学習支援に加え、面談を実施する学生の対象を広げるなど、単位修得率の向上に向けて改善を図っていく必要がある。
学修成果	「データリテラシー・AIの基礎」では、毎回、授業内容の理解度、教材や課題の適切性についてアンケート調査を行った。また、学内の教務システムを利用した授業アンケートでは、実践的な演習を通じたスキルの獲得、確認テストによる理解度の把握、AIやデータリテラシーなどこれからの時代に必要な知識を幅広く学べる有益性などが成果として挙げられていた。	各種のアンケート結果より、概ね高い評価が得られているが、授業動画の配信クオリティに関する要望が一部あったことから、来年度は学生の要望を踏まえた対応が必要である。
学生アンケート等を通じた学生の理解度	前項に記載した毎回のアンケート調査において、授業の理解度は7割から8割前後が「よく理解できた」、「だいたい理解できた」と回答していた。また、理解度のばらつきが昨年度と比較して小さくなった。課題の難易度は「適切である」との回答が大半であった。確認テストの正答率が7割を下回った問題が令和6年度は全体の13%だったのに対し、令和7年度は9%と減少しており、確認テストの難易度については適切に設定できていたと考えられる。	少数の意見ではあるが、授業回によっては難易度にばらつきがあるという声もあることから、今後も学習成果を測るために適切なレベルでの確認テストの問題作成に努める必要がある。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	「データリテラシー・AIの基礎」は全学必修科目であるため、本学の入学者は全員受講することになる。したがって、後輩学生等への推奨度については確認していないが、本科目に関するホームページには、受講生の声を掲載し、科目の特徴や身に付いた知識・スキルをわかりやすく紹介している。また、令和8年度入学生向けのキャンパスガイドでは、本プログラムの内容を紹介している。	今後もキャンパスガイドや受講ガイドにおける本プログラムの紹介内容を充実させることで、本プログラムの受講の目的・意義を伝えていく必要がある。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	令和3年度より、本プログラムの授業科目「データリテラシー・AIの基礎」は全学必修科目として開講しており、同年度以降の入学者はすべて本プログラムを履修している。	全学必修科目として5年目が終了し、概ね順調に推移しているが、再履修学生の単位修得率を向上させる方策や学習支援の方法を検討する必要がある。
学外からの視点		
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	今年度の卒業生は、プログラムの修了者としては2期生になる。今後、進路調査や企業等の評価を実施していく予定である。	卒業生は全員が修了者であることから、卒業時にアンケートを実施して、より具体的な修了者の声を取得するなど、多面的な評価を行っていく必要がある。そして、卒業生の進路については令和5年度以前と令和6年度以降の卒業生の進路を比較し、変化があったかどうかの効果測定を行う必要がある。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	生成AIの進化が加速的に進み中で、生成AIの活用や倫理的な面が課題になっている。また、データサイエンスを学ぶことができる大学が増えている中で、産業界はどのような人材を必要としているのかを注視して、今後の授業内容に反映していく予定である。	産業界との連携は引き続き課題として残っている。令和7年度の共通教育カリキュラム改革におけるアドバイザリー会議(有識者会議)の場では、生成AIとの付き合い方を学ぶ機会(プロンプト、検証、引用・著作権、限界の理解)が必要との意見があった。本科目だけではなく、共通教育科目・大学全体のカリキュラムとして、AI・データサイエンス領域の人材育成をどのように行っていくのか、産業界の要望を踏まえた全体像を示すことが必要である。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	昨年度同様に後期の全学実施に向けて、前期の「初期演習Ⅰ」では本科目の概要を紹介する導入講義を実施し、本プログラム(科目)の目的や目標、データサイエンスやAIについて学ぶ意義の理解を促した。	後期の授業に向けて前期の時点から、本科目の概要を紹介する導入講義を実施していることは評価できる。今後も多様な学部学科の学生が受講する上で、「学ぶことの意義」を伝え、学生の受講動機をさらに向上させる取り組みを実施することが必要である。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	今年度は授業の理解度について、各授業回のばらつきが昨年度と比較して小さくなっており、改善の成果が表れている。今後も「分かりやすい」授業をめざしながら、授業動画の配信クオリティを上げていくことで、授業の水準の維持・向上に努める。	オンデマンド授業であるため、授業動画のクオリティも学習意欲や学習成果に関係してくる。全学必修科目であるため、今後も授業の内容と水準の維持・向上に努める必要がある。